

レ  
ン  
ズ  
越  
し  
の  
未  
来

登場人物一覧

小野寺	みちる	(16)	高校1年生
小野寺	真一	(43)	みちるの父
小野寺	花	(43)	みちるの母
小野寺	なぎさ	(13)	みちるの妹
男A	(50)		
男B	(50)		

## 概要

小野寺みちる（16）は、津波で家を失ったが、家と一緒に眼鏡を流され、流された家や街の惨状をまだ見ていなかった。ある日、父の真一（43）はみちるを家の跡地へと連れ出す。真一は、残った家の瓦礫の中から、みちるの眼鏡を探し出していた。眼鏡をかけ、瓦礫となった家を見て思わず泣くみちる。真一は「生きているだけでそれでいい」とみちるに諭し、みちるは少しずつ、復興に向けて前を向こうとするのだった。

みちる「お父さん、今日も行っちゃうの？」

真一「うん。早く水道直さない」と

S E           チャイム

アナウンス「避難所の皆さん、朝ごはんの配給です。順番に取りに来てください」

みちる「お父さん、ごはんは？」

真一「どこかのタイミングでもらうよ。お父

さんは大丈夫。じゃあ、行ってくるね」

みちる（M）「お父さんは、水道工事の仕事を  
している。だから、あの日から、ずっと働  
き続けている。海の近くにあった私の家は、  
津波で流されたらしい。らしい、と言うの  
は、まだこの目で見ていないからだ」

なぎさ「みちる姉ちゃん、おにぎりもらおう」

みちる「あ、うん」

なぎさ「今日は具が入ってたりするかな」

S  
E  
人混み

花「はい、おにぎりと味噌汁ね」

みちる「お母さん、ありがとう。あのさ、私

にやれることは……」

なぎさ「姉ちゃん、あっちで食べよー」

花「なぎさ。お姉ちゃん、眼鏡がなくて良く

見えないんだから、迷惑かけちゃダメだよ。

みちるも、足下気をつけて」

みちる（M）「家に置いていた眼鏡を流された

私は、津波で一変した街の風景も、ぼんや

りとししか見えていない」

みちる「今の私って、役立たずだな……」

なぎさ「姉ちゃん、なんか言った？」

みちる「ううん、なんでもない」

みちる（M）「避難所の生活は、毎日何かが変

わるわけじゃなく、不安だけが増えていく」

男 A 「そういえば、港の近くでまた遺体が見  
つかったって」

男 B 「ああたり、ひどい被害みたいだよ」

みちる (M) 「私の家の近くだ。嫌だな……」

みちる 「ラジオでも聴こう」

S E ラジオをつける

ラジオ 「……南海トラフ巨大地震の被害状況  
ですが、本日時点で死者数は……」

みちる 「……チャンネル、変えよう」

ラジオ 「いつか絶対に復興できます！ 全国  
から応援しています。みなさん頑張ってく  
ださい！」

S E 勢いよくラジオを切る

みちる「いつかっていつ？　頑張ってください  
いって、今は頑張っていないってこと？」

真一「みちる、どうかした？」

みちる「お、お父さん……。仕事終わったの？」

真一「うん。みちるは、今日はどうだった？」

みちる「……。私って、頑張っていないのかな」

真一「みちる？」

みちる「お父さんはみんなのために、水道を  
直しているし、お母さんは避難所の手伝い  
をしている。私はただ毎日、ぼんやりと生  
きているだけな気がする」

真一「……。みちる。少し、家に帰ろうか」

S E 波の音

真一「初めてだよな。あの日から家に帰るの」

みちる「……。うん」

真一「お父さんな、仕事の合間にここに来て、

家の瓦礫を整理していたんだ」

みちる（M）「お父さんが立ち止まって、私も足を止めた。震災前の家ではなかった、潮の香りがした」

真一「家の瓦礫があるなら、残っているかも  
と 思 っ て 。 み ち る 、 手 を 出 し て 」

みちる「これって……、私の……」

真一「そう。みちるの眼鏡だよ。レンズは傷  
が 入 っ て い る け れ ど 、 見 え る は ず だ よ 」

みちる「わざわざ、瓦礫の中から探したの？

あるのかもわからないの？ なんて……」

真一「みちるに、ちゃんとこの景色を見て欲  
し っ か っ た か ら だ 」

みちる「……私、怖いよ。だって、16年間  
生 ま れ 育 っ た 家 も 、 家 の 周 り も 、 何 も か も  
変 わ っ て い る ん だ よ 」

真一「見たくない景色かもしれない。目を背  
け たい 景 色 か も し れ ない 。 そ う か も し れ ない  
い け れ ど 、 逃 げ ず に 目 の 前 を 見 る ん だ 」



みちる「……わかった」

みちる（M）「私は、大きく深呼吸をした。そして、ゆっくりと眼鏡をかけた」

みちる「あ、ああ……。家が……」

みちる（M）「ぼんやりしていた視界が、数日ぶりにハッキリした。目の前には、16年間生まれ育った家の残骸があった。泥まみれでバラバラになっている、家族みんなで使っていたテーブル。私がお小遣いで集めた大好きな漫画は、海水をかぶって、しわくちゃになって、地面に散らばっていた」

真一「迷ったよ。この景色を見せるかどうか。でも、見せた方がいいと思っただ。辛い景色かもしれないけれど、どこかで受け止めなきゃいけない。だから、眼鏡を見つけないきやと思っただ、毎日探したんだ」

みちる「……お父さんは、強いね」

真一「強くないよ。毎日ビビっているよ」

みちる「え？」

真一「水道管を直している時、地震が来ると怖いんだ。津波がきたらどうしよう、瓦礫の下敷きになったらどうしようとか。だから、毎日、避難所に帰って、みちるや、なぎさや、お母さんの顔を見ると、生きていて良かったって思うんだよ。それだけで、毎日の仕事を頑張れるんだ」

みちる「そんなことで、いいの？」

真一「そうだよ。それだけで、力になってい

るんだよ」

みちる「……みんな、前を向いているように見えるんだ。自分だけずっと止まったままじゃないかって。『きっと復興できる』とか、『頑張ってください』とか、いろんな言葉が聞こえるけど、受け入れられなくて」

真一「自分の気持ちに蓋をしなくていいんだよ。1日、また1日と生きれば、いつかき

っと前を向けるはずだから。生きているだけ、それだけでいいんだ」

みちる「……うん」

真一「みちる、生きていてくれてありがとう」

みちる（M）「お父さんは、久々に私の頭を撫でた。お父さんの手は、ゴツゴツして、そして、暖かかった」

S E 波の音、二人の足音

みちる（M）「それから、お父さんとすっかり暗くなった家の周りを歩いた」

みちる「何もないね。瓦礫ばかり」

真一「この辺りはすぐ海だからなあ」

みちる「海って、こんなに近かったんだね」

真一「何もなくなると、海が近く感じるな」

みちる「……これからどうなるのかな」

真一「どうなるんだろうなあ」

みちる「お父さんは、不安じゃないの？」

真一「不安か、不安じゃないかって言われたら、不安だよ。でも、今が俺たちの人生のどん底だ。逆に考えたら、あとはもう良くなる一方ってことだ」

みちる「良くなる一方……」

真一「そう。家はなくなったけれど、家族はみんな無事だ。家族さえいれば、俺にとって何てことないよ」

みちる（M）「父はそう言うと、歯を見せて笑って見せた。月明かりに照らされて、父の笑顔はなんだか眩しく見えた」

S E  
チャイム

アナウンス「皆さん、朝ごはんの配給です。

順番に取りに来てください」

みちる「お父さん、これ、今日の朝ごはん」

真一「手伝い始めたんだな」

みちる 「みんなに配るだけだけどね。……今  
は、ちゃんと手元が見えるから」

真一 「（嬉しそうに）そうか」

みちる 「今日も帰りは遅い？」

真一 「そうだなあ、遅いかもなあ」

みちる （M）「どういう状態になったら、『復  
興した』って言うのだろう。数年後、数十  
年後にはそう言えるんだろうか。今は全然  
想像がつかない。でも」

みちる 「お父さん」

真一 「うん？」

みちる 「生きていてくれて、ありがとう」

真一 「……なんだか恥ずかしいな」

みちる 「お父さんもこの前いってくれたじゃ  
ん……。じゃあ今日も、いってらっしゃい！

頑張ってきてね」

真一 「ありがとう、行ってきます！」

みちる（M）「毎日を精一杯生きること。きっとそれが、復興の大きな一歩になるはず。私はそう思った」

（了）